VI. まとめ
　「ナル」における＜X＞と＜－Y＞＜＋Y＞との関係の多様性および＜＋Y＞の重要性が確認できた。

参考文献
　石綿敏雄 (1972) 「助詞「に」を含む動詞句の構造」
　電子計算機による国語研究4国立国語研究所

修士論文「福井県若狭地方方言の言語地理学的研究」要旨
　加藤和夫
　（付属資料：若狭地方方言地図）

内容は大きく5つの章より構成される。
まず冒頭で「1. 研究の目的を述べ、2. 調査地域について」では、従来の方言地図の立場から若狭地方方言の位置を概観し、さらに言語外情報を、「地理的条件」と「地域史概要」の2つに分けて略述した。また、「3. 調査と言語地図の作成」では、本稿の基礎資料としている若狭地方方言地図を作成にあたっての「調査方法」「調査項目」「調査時期と地点—項目により111地点のものと181地点のもの—および話者、言語地図の作成について」を具体的に述べた。
ここまでは序論で、本論は、内容的に大きく2つの章より成る。

前半の「4. 若狭地方方言の言語地理学(1)—言語地図から言語史への」では、いわゆる従来の言語地理学説に基づいたところの、言語地図の解釈を中心として、解釈の体系化と妥当性をめざしたものである。
ただ、「4.2 語法の分布と解釈」においては語法の分布に見られるような地域差は多くの場合期待できず、「指定・断定の助動詞「ジャ」の分布」などでは、分布の実態報告という面がやや強くなっている。
まず、「4.1 1語句の分布と解釈」のうち、「とうもろこし」と「とうがり」におけるnamban、「もみがら」と「ぬか」におけるnukaの分布については、特に、同音音頭とその回音現象に注目してその解釈である。
「桑の実」「もろい」「つら」「つむじ」の分布については、各々に解釈を施す過程で、「方言周辺論の適用の限界」について述べた。
「かめ虫」の分布については、その個言分布と背景にある「かめ虫をつかむ時、咲かないようにするじゃない」の分布を解釈の手がかりとして、doromuji、ogamui等の命名動機とそれらの歴史的旧古関係を明らかにした。

「発と歌」の分布は解釈は、過去に研究報告のある「鳥追い歌」の場合と同様、同稿の分布に言語地理学的解釈を加えたものである。若狭地方の「発と歌」の場合、特に第一節は平 Opens a new window 章を中心に歴史的変遷の跡をたどることができる。

「親族呼称」の分布については、親呼と母の呼称を中心に、若狭地方の一般家庭で行われたであろう呼称の変遷を明らかにした。そして、「兄の呼称」を除く「祖父母」「子供」の呼称が、「親呼」と母の呼称と似た分布パターンを示すことから、それぞれの呼称がひとつに話葉体系として変容してきたことを推定した。
次に、「4.2 語法の分布と解釈」では、「受身・可能性」の分布で、受身・可能性の助動詞の歴史的旧古関係を推定するとともに、可能表現については、本来能力表現であると考えられる「Jie」という形式、また、全国的にも全く例を見ず、従来仏と報告のなかった「〜karashen」類（能力可能）の存在を、その新古関係を通じて報告・考察した。
「指定・断定の助動詞「ジャ」の分布」では、従来、若狭地方にも分布するとされていた「ジャ」を言語地図の形で報告し、いくつかの異なった表現「ジャ」の前接形式の違いによる一における「ジャ」の現れ具合から、若狭層での「ジャ」から「ヤ」への交替を総合図の上で示した。
また、「打消の助動詞」の分布と解釈では、「〜n〜fen(〜jafen)〜henの変遷の跡を、「受動助動詞」の分布と解釈では、「〜nasaru〜naru〜jaru〜jafraru〜nsaru〜jansuru」の歴史的旧古関係を明らかにした。
一方、後半の「5. 若狭地方方言の言語地理学(2)—分布パターンと方言傳播地域学」では、いわゆる京言葉を中心としたかつての中央語や、周辺部の言語勢力が、若狭地方に、どのような位置伝播地及び分布を、まず分布パターンで整理し、それに言語体育学的解釈を加え、さらに伝播パターンとして大きく3つに分けた。

1つは、「小浜を中心とした波状伝播型」、これをさらに「若狭広域型」と「若狭中央型」に分ける。残り2つは、「西部侵入伝播型」と「東部侵入伝播型」で、前者はさらに「高浜・大坂型」「名田庄型」「西部
修士論文『日本語複合名詞の研究』要旨

加藤 久雄

第1章「複合名詞」の術語をめぐって

大槻（1897年）、松下（1930年）、安藤（1931年）、山田（1936年）、橋本（1934年）、時枝（1950年）、在田、斎藤（1957年）、斎藤（1957年）、中野（1975年）の4文献である。

山田、阪倉、斎藤が、複合名詞の前項後項の意味関係に基づき主従関係、並立関係などの分類、前項と後項の品詞性に基づき分類の2本立ての記述をしているのに対して、複合名詞を連体修飾構造の凝縮と考える生成文法の立場からの考鏡の記述は、その2本立てを1本化することに成功している。1957年、在田、斎藤は、複合名詞の重複を伴わないものの、1960年、斎藤は、名詞連体化の立場からの考察を試みた。ただし、日本語の複合名詞の記述としては、

1. 複合名詞変形規則の拡充が必要であること。
2. マトリックスの拡充が必要であること。
3. 空白についての理論的説明が必要であり、偶然の空白については、それを埋めるべき複合名詞の実態調査が必要であること。

などの、残された問題点があることを示した。

第3章「複合名詞の記述」

上記の3点について考察した。

複合名詞を連体修飾構造の根拠であるとする生成文法の方法を用い、簡易五十音順長単位表（京師報告48（1973年）「電子計算機による新変の語彙記録」（IV部） pp.131-530）を対象として、そのシステムサンプルグ、複合名詞（1385語）の実態調査を行った。その結果を、複合名詞の第1項を、第2項を列にする1辺が44種の成分からなる正方マトリックス（行列）の形で分類整理した。

この調査で中野（1975年）では触れられていない、「格助辞」、「作業」、「台架」、「宇宙旅行」など、過去の研究では触れていない新語群を発見した。

「複合名詞」、「雨空」などの新しい型の

複合名詞を見出すことができた。また、この複合名詞のマトリックスにおける空白のあり方（体素の空白か偶然の空白かの弁別など）について、複合名詞の深層構造である連体修飾構造の類似に複合名詞を分析することによって、理論的説明を加え、(4)から(7)の複合名詞変形規則として定式化した。

(4) 同一連体修飾構造から生成される複合名詞の変形規則 CNT 1

CNT 1 A

SD: [NP[Subj[Adv(Ad)]][Pred(Ad)][Tense]]\((N\text{-Additive})\]

SC: 1 φ φ φ 5

例

春ニ 呼応風⇒春風(NN型)

(5) 相対連体修飾構造から生成される複合名詞の変形規則 CNT 2

CNT 2 A

SD: [NP[Comp(Subj)[N[M][Pred(Ad)]][Tense]]\((N\text{-Relitive})\]

SC: 1 φ φ φ 5

例

神宮ゲ アル 前 ⇒ 神宮前(NN型)